

繪本通俗三國志

七編

四

東京圖書館

和書門

小說類

二六函

一七架

七八號

七五冊



繪本通俗三國志七篇卷之四

目錄 明治十年交換

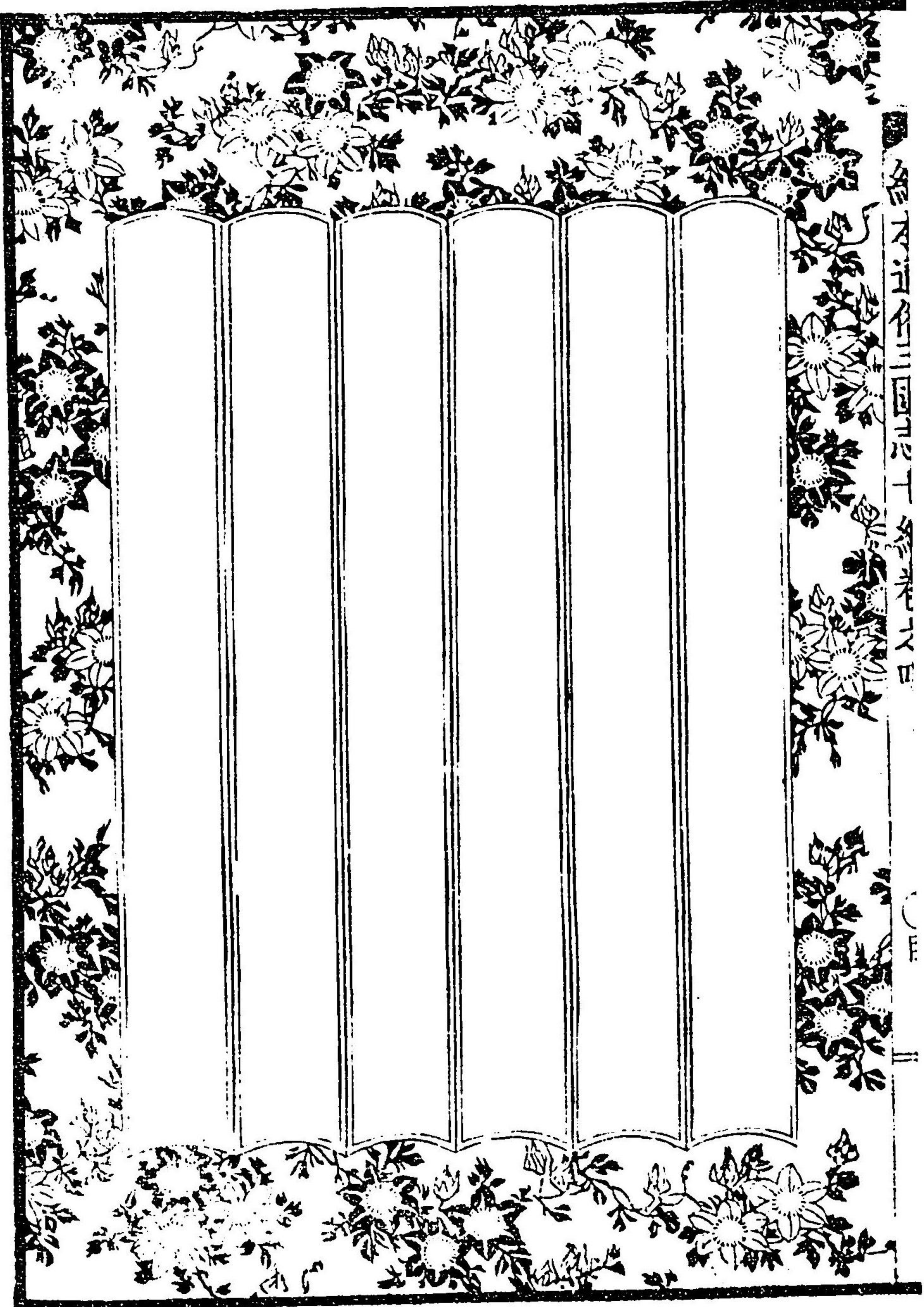
孔明造木牛流馬

孔明葫蘆谷燒神達

孔明秋夜祭北斗

繪本通俗三國志七篇卷之四

目



繪本通俗三國志七編卷之四

孔明造木牛流馬

浩るある。魏の大將鄭文との争ひの蜀の陣より来りて降参せ
 んと望けり。孔明對面して其故を問ふ。鄭文曰く。前將
 某の魏の偏將軍あり。近北秦朗とや。もと争ひの共々兵を
 兵して。司馬懿が催し應む。司馬懿私めりて秦朗を前將
 軍として某を某のどく。輕ん。あまのや人殺さん。いふ事
 意あり。是ゆゑに丞相に降る。祐がけの忠を尽して。此來て報
 ぜん時。又存候の兵をせま。魏の陣より秦朗との争ひの兵
 を引て。よせ。鄭文と戦んとよび。りひと告げま。孔明
 中ける。秦朗が武勇。及び比せ。いふ人。鄭文が曰く。某の戦

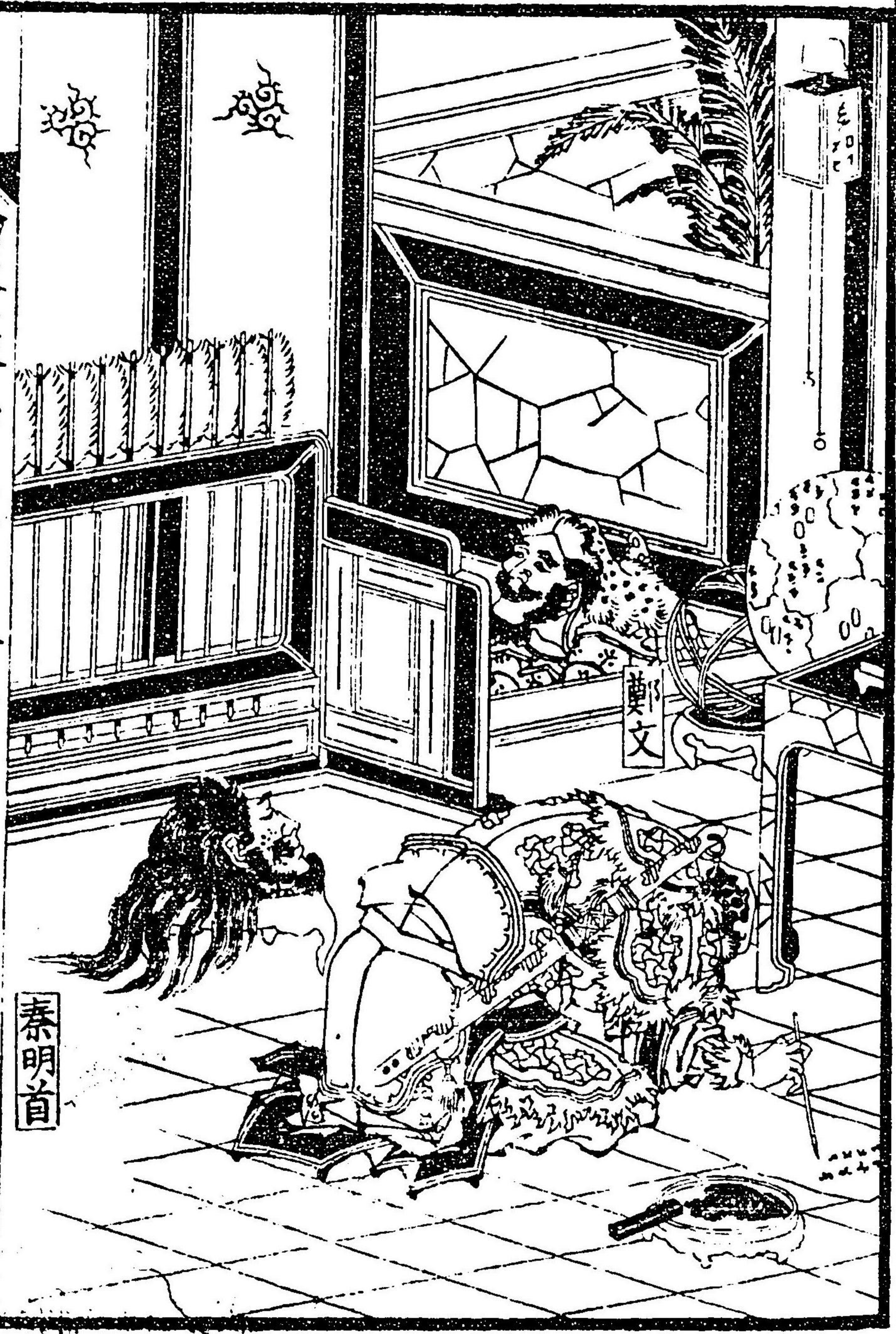
つ立所より打取人孔明が曰く。秦朗は攻来まり。汝を討取らば我らより重く用ん。鄭文喜人を馬のり。孔明は向ひけむ。孔明も自ら坐て望見る。秦朗大に驚て反賊鄭文おんど。我馬を盗たる速に返せとて鎧を拵く。蒐ける。鄭文刀をまかりて只一合の斬て落し。魏の勢をさんぐ。打破り。首を提て回けむ。孔明すけり。汝は行て秦朗が屍衣裳と取来。鄭文とり来。孔明はせけむ。孔明大に怒り。武士を命じて首を斬。孔明は文叫んで曰く。某おんの罪は。孔明が曰く。我をけむ。より秦朗とまじり。汝をよとして我を欺く。鄭文拜伏して曰く。おとをむ。秦朗が弟は秦明とや。孔明笑く。

曰く。司馬懿が計りて汝を降し。中にて計を行はんと。汝あり。のたまふ告をんを我らもらむ。首を斬。鄭文震ひ。拍を卒。企の中を詰り。孔明が曰く。汝を命を扶らん。と。自書簡を調へ。司馬懿内通して。我陣を攻させ。然ると。重く用ん。鄭文已とて得ず。かち書簡を調へ。孔明は。檻車に入。とて投へ置。と。又樊建問て曰く。丞相あよとして。此人の詐ある。と。孔明明が曰く。是ホの計。は。その気色。を。況や。司馬懿の。輕く。人。を。用ひ。若。秦朗。を。前。將。軍。と。封。ぜ。武。勇。を。ら。ぬ。人。は。勝。り。た。ら。ん。今。鄭。文。と。馬。を。交。へ。て。只。一。合。り。計。ま。し。の。真。の。秦。朗。は。あ。ら。ざ。る。驗。あり。此。の。人。は。我。を。け。む。ま。よ。

新編 太平御記 卷之七

魯哀公十四年春西狩獲麟

四



秦明首



漢書卷之七

四

朗二万余騎と付て先手と自ら大軍と率して後陣
 又繞く。その夜ハ風清く月明なりけるが初更の比より俄
 陰雲四方よりおひ。倏と霧起けし。司馬懿も驚き、
 是天の助るありとて人の救を缺し馬を勤
 して己の蜀の陣よりよせ秦朗が二万余騎を引し。黄分
 けるは敵一人もえんぞり。初めの計は落し。一たびの
 まさうに列回さんとさると。四方より火をうけて。喊の声ハ
 震ハ鼓角天を喧しく。鉄炮地を轟かせし。魏の勢をどつ
 乱して。孫も左より王平張嶷右より馬岱馬忠一齊討
 て出二騎も余さずと取まむ。司馬懿後陣の勢を引し。是
 て救んとさると。忽然として哄とどつと造り左に竊に

右に姜維二手の勢討て出さんと。又破り。司馬懿
 大半討てて我さた。又と敗北を。秦朗が二万余騎へ命を
 戦ひ卒も一人も残らざりて。秦朗も一騎田を突て出
 んとさると。蜀の大勢雨の降とく矢を放りて。乱軍の内
 射殺さ。孔明山の上より。金をあらして軍を収め。本
 陣に入りけし。天気がちぬ。晴て月の光昼の如く。孔明
 ともあつ。鄭文を引出して。その首を刎せ。重く謀軍を賞
 ける。司馬懿も。逃して本陣を回。敗軍をめめけ
 れ。二人告て曰く。初更の時分。天気が俄に陰なり。孔明
 門遁甲の法を用ひしあり。後蜀の勢を尽く収りて。天を
 又たとわたりし。孔明をあら。六丁六甲の神を誑て。浮雲を

ちらひ除き一ありと。君りけとバ司馬懿大に嘆して曰孔
 明へ真に神人なりとて。堅く要害を守りて出で戦とあら
 りけり孔明へ毎日戦ひを催せども。魏の勢をさうみ生さる
 る。自車馬のりて。祁山の前渭水の東に坐す。辺の地理を考
 る。必心ち形葫蘆のごとくある。谷の口を内へ入てまことと
 ばすの廣千余人を容ゆべし。両方の山相合て。又一川の谷あり
 四五百人を容ゆべし。その後へ大山聳て。鳥も翔がとく。僅ま
 そき小路ありて。一人一騎を通ゆべし。孔明の内深く。よろ
 ちび案内者となりて。谷の名を問。上方谷とや。又葫蘆谷
 ともや。と。また孔明本陣を回。ひさる馬試せよ。ん。や。け
 ろ。汝一千五百の勢を率ひて。五百人への谷の口を守らせ。て人を

容む。千人の谷の内。ま。毎うく。工とあさ。わよ。是兵一人も
 外へ出とあ。れ。又。外。二人も内へ容。るとあ。れ。我。の
 うら。不時。又。行。て。汝。又。教。べ。し。仲。達。を。擒。ま。さ。る。と。口。ま。の。計。を
 あり。若。外。に。泄。し。あ。び。必。ま。で。汝。が。首。を。切。ん。と。て。一。く。は。計。の。様
 と。教。け。し。と。バ。馬。試。命。と。受。て。谷。の。内。に。入。り。日。夜。に。工。造。ら。し。む。
 孔明も毎日行て指図を。お。り。け。し。と。バ。覺。む。十。余。日。に。過。し
 けり。浩る。る。に。長。史。楊。儀。來。告。て。今。蜀。中。より。運。ぶ。の。兵。糧
 と。く。劍。閣。の。前。の。牛。馬。の。り。て。運。送。ま。さ。る。と。い。ふ。道。路。難
 難。し。て。軍。用。足。ま。で。い。ふ。ま。ま。と。い。ひ。け。し。と。バ。孔。明。笑。ひ。て。曰
 く。我。本。國。を。生。ま。る。と。た。巴。の。事。を。慮。る。先。に。蜀。中。より。
 を。ま。い。來。ま。る。材。木。を。の。り。て。木。牛。流。馬。を。作。ら。し。然。る。と。た

の牛馬の飼料とも用ひて昼夜路と急ぐ便あらん。諸人か
かどろひて曰く。伏羲乾坤を開辟し、ひてより今の世まで
で卒に木牛流馬の事をきく。願わくし人の孔明が白くまを
己の法のごとく造しむとく。人ども未全く備らば今こそ
寸尺と写して明に汝の教を傳へらる。將士來集り坐
せりて造る。木牛と造る法は曰く。

方腹曲脛二股四定頭入領中舌着于腹載多而行少獨
行者數十里群行者二十里曲者為牛頭雙者為牛脚橫
者為牛領轉者為牛足覆者為牛背方者為牛腹垂
者為牛舌曲者為牛劬刻者為牛齒立者為牛角
細者為牛鞞撰者為牛鞞軸牛脚雙鞞入行六尺牛

行四步每牛載十人所食一月之糧人不乏勞牛不飲
食也

流馬を造る法は曰く。

肋長三尺五寸廣三寸厚二寸二分左右同前軸孔分
墨去頭四寸徑中二寸前脚孔分墨二寸去前軸
孔四寸五分廣一寸前軸孔去前脚孔分墨二寸七
分孔長二寸廣一寸後軸孔去前軸孔分墨一尺五分
大小其前同後脚孔分墨去前軸孔三寸五分大小
其前同後軸去後脚孔分墨四寸七分後載尅去後
軸孔分墨四寸五分前軸長一尺八寸廣二寸厚一
寸五分後軸與等板方囊二枚厚八分長二尺七寸

高一尺六寸五分廣一尺六寸每枚受米二斛三斗從上杠
 孔去劬下七寸前後同上杠孔去下杠孔分墨一尺三寸
 孔長一寸五分廣七分八孔同前後四脚廣二寸厚一寸
 五分形制如象軒長四寸徑面四寸二分孔徑中三脚
 杠長二尺一寸廣一寸五分厚一寸四分同杠耳

諸人あまをてて大まおどろき拜伏して受けらるゝ丞相の真ま
 神人ちりの藻の天下再び與るべし半月を生ざるま木牛流
 馬尽く作出し宛然として生るまどろし山ま上り山嶺を下
 りてまのくその便を尽しけしむ諸軍あまをてて喜びをま
 とのまをのま孔明まづ右將軍高翔を大將として千人
 の人夫を遣し劬閣より兵糧を運せけしむ蜀の軍勢皆糧

を飽て心勇まとしりまのまをく討て出て敵を破り丞相の徳
 を報ぜんまぞ受けらるゝ司馬懿の先日の戦まおびしく軍馬
 と失ひ固く守めて出ざるけるま勿ち斥候より告ぐ蜀の
 勢木牛流馬を造出しおびしく兵糧を運で人も苦しむ
 お牛馬の飼料をも用ひむと報トけしむ司馬懿大に愕
 き色て失めて受けらるゝ我固守めて戦ざるま只敵の兵糧を
 詰ると待てるのあり孔明の及木牛流馬を用るものおれ長
 久の計あり我の及して退くまきとて急ま張虎樂琳をよひ
 よせ汝二人の五百余騎を引て斜谷の小路に埋伏し蜀の
 勢の木牛流馬を誑て来ると後より切て蒐り何とぞ西
 五疋奪ひ来るといひけしむ二人命を受夜中ま路を替

谷の内は伏居たり。そのとら右將軍高翔、木牛流馬を造り、魏の勢を分して殺到す。蜀の勢は亂れて我をたんとし、逸けて六張虎樂琳とぞとあつて追む。木牛流馬のく二疋を奪ひ上り、積たる兵糧を打棄て急ぎをせりける。司馬懿は驚き、進退まじり生るがごとくありけり。喜び申ける。孔明は計を用て、兵糧を運ぶ我をんぞもちひざらんやとて、巧匠百余人を集めて、尺寸長短を揃へ、違ふ夜を日と繼て造らせけり。半月の内は二千疋を作し、孔明が法を相違なく進退よく便を得たり。司馬懿は驚き、喜ば、鎮遠將軍岑威を大將とす。千余騎の兵を授けて、

隋西より兵糧を運をいむると休時あり。蜀の大將高翔、祁山を回し、孔明を見へ。魏の勢は木牛流馬のく二疋を奪ひたりと告げし。孔明笑ひて曰く、あつて願ひする。汝はよ近き内はふりぎある兵糧をたびとく得べし。諸將問て曰く、あつていりある故にてゆぞ。孔明が曰く、司馬懿はあつて我寸尺を效く。木牛流馬を造らん。我のたとえ計を用ひんとて、十日をかりて經ける。案のどく、斥候の士卒告て申ける。魏の勢は木牛流馬を造りて、隋西より渭水に陣へ兵糧をたび。孔明大に喜び、計を出すとて、王平を召て申ける。汝千余騎の精兵を引て、魏の勢をたせ、夜中に北原を通て、問のあらば兵糧を運めんとと答へ、

西の路條に坐て。魏の勢の木牛流馬と引來るとた一度斬て蒐て。尽く追ちし。その牛馬を奪て。北原より回り來れ北原に。魏の大將郭淮が城あり。定て討て出て戦べし。汝ホそのと兒木牛流馬の口をひらき。舌と扭轉してきておけ。志ろと兒の敵めて追來ら。我又別な計ありとさしけれ。王平兵を引て出まけり。孔明又張嶷とよんですけぬ。汝五百の勢を率し。六丁六甲の神兵を出立。頭の鬼のたし。身の獸のごとく五色をゆめて面をぬり。甲子甲寅のよるのどと。怪げある形をちりて。一閃の手を。宝劍を執。一閃の手への錦の旗と持。腰に葫芦をうけて。内を硫黄焰硝と入。山の陰に深く隠れて。魏の勢の北原より出て。木牛流馬と引ま

回るとた。一度よりけ出て。火烟を放ち。敵と追散して。木牛流馬を奪ひ。また魏の勢をよとて。ぶらぶら驚馬を疑く。逃去べし。またさあち神師の計をう。次は姜維。魏延と召て。すけ。汝二人か。かのく。一方の勢を率し。北原より行く。敵と拒む。木牛流馬を送來れ。又廖化張翼と呼んで。汝二人いとも。五千余騎を引て。司馬懿が來る路を塞げ。又馬出馬忠とよび。汝二人か。かのく。二千余騎を引て。魏の陣をよせ。渭水の南より戦ひ。催せとして。手配をよ。了け。且び自思ひく。よ生まけり。去程に。魏の鎮遠將軍岑威は。おひき。木牛流馬を詔て。陝西より。兵糧を運びける。向よ一手の勢を。が。より返りて。おへたる。とて。へを遣し。何者

孔明
木牛流
馬を
造る



孔明木牛流馬

孔明



孔明木牛流馬

孔明

ぞし問ひぬれば皆兵糧と運ぶの事ありと答はるるなりと云ふ
と安んじ己は交近きなりけりとの其勢忽然として哄と
のいと造り蜀の牙門將軍王平馬を飛して討て蒐る本威
大よおどろひて是と拒んと強ぐるも王平は一カは斬て
落し木牛流馬を奪て北原の路より回らんとし魏の敷
軍の由て北原の城を告げし大將郭淮大勢を討て討てい
て是と追てこそあると急ちり王平兵と下知して木牛流馬
の舌と扱まり尽く打奔て且戦ひ且走る郭淮木牛流
馬とどろ返しぬと急ちり討て回らんとし如何に
ども更も動も是へ何とぞとあやしく駭き奔てや回と
議さるるも忽然として鼓角天よりまびとて哄の芭地

と動して二手の勢殺到と是とあやしく姜維魏延ちりあれ
をえて王平も取て回し三方より攻けし郭淮も敗れて
退くも又山の中より火烟を放りて一彪の神兵飛ぶとく
まうけ出たり魏の勢膽を冷してさるるも怪気ある
鬼形のもの共手も劔と抜て錦の旗を閃らし彼動する木
牛流馬をひそり舌をぬり戻し風擁して引回る郭淮是
をえて膽を冷し是徒事ありと必と神の助あらん追
てあつれとて徒を回しけり司馬懿へ渭水の陣を居たり
けるが北原の軍ありて敵兵糧を奪ひぬと告げし郭淮
兵を引て救の為に出ける感ひも寄むと半途に至る俄と鉄
砲ひま哄の芭地を震く二手の勢前後より討て生る魏

魏の軍は北原の軍を討て生る魏の軍は北原の軍を討て生る魏

の勢をどろいて是をんとし、蜀の前軍都督張翼飛衛將軍
 廖化ちり。司馬懿色を失ひ、志づらく支て戦ふと人ども前
 後と拒ぐして、駐をさんぐ。乱れで討つるの報を知り
 我を死すと逃走。司馬懿へ只一騎馬を飛して林の中と
 走けるを、廖化をよとて付て願ふの敵も天の與ちり
 喜ひ揉みゆいぐ。追りけ、已に交近くちりけるとき、司馬
 懿大木を遠く走けるを、廖化刀をあげて八と斬る。司
 馬懿が運の強みやその鋒打逃して、木を斬付、抜んと
 する間、司馬懿を林の外へ出まけり。廖化腹を立跡を志
 たふく追りけしが、俄にその行方を失ひ、傍る路に司馬
 懿が被たる黄金の盃を落たりけり。此路へぞ逃りしん
 て飛ぐとく、追て行司馬懿のあやりのまきびく追を、盃を抜
 で林の東に落し、却て西の路へ走けり。廖化の盃をとりて
 東の路へ追て行けぬ。されよりて、司馬懿より命を逃の
 びより、是は一時の智謀なり。廖化は西を望んで谷の口を
 来り、姜維が勢と一手をとり、本陣を回し、司馬懿が盃を
 出し、その日第一の功と定め、張疑へ木牛流馬を詔ぐ。魏の
 兵糧二万石あやりのをとり来り、共々勇傲りけり。魏延今日
 の軍に己が功名せざるを怒り、まきり、怨言を吐けり。ど
 も孔明へまづらぬ体にて居たりけり。

孔明 蒟蒻谷 燒仲達

司馬懿へ謀るの軍は多々の軍馬を失のた、兵糧積たる木牛

流馬數百疋を奪はず涪水の陣に遊ばせりて。この内患は
苦むるも雒陽より早馬きたり。此比呉の孫權大軍を
三手に分て荆及び都へ攻入んと欲す。蜀の勢いよ退ら
ざるも呉の大敵東を犯して都の騷動ありあらん。方一事
を仕損むるもたぐへ。天の安危たのとならあり。まじく要
害と固て出て戦とあられとの勅命ありと告げし。司馬
懿大よおどろきひやく緊く召ありて。一人も出るとはは
と死呉の孫權へ孔明が書簡を得てす。三十万の勢を
起し三手に分て魏を攻んと欲す。魏主曹叡とてやて
朕もつら出て破らざらん。西に孔明あり。都の内靜ある
や。として文武の諸將をめりて。討て殺しければ大尉

滿寵が曰く。今呉の勢三方より攻上五味方より新城を
くらく敵を破り勝を乘たる勢を以て流は志はばく。乘
陽城と救は呉の勢。ふぐら退くべし。將軍田豫が曰く。呉
の勢いよ力と尽して。新城を取んと欲す。志あらんも要害
よけよ。あましく。まじく。落してあこ。今その攻るに任せ
置後よ攻めんと。銳氣を失ひ疲きたると。却て大軍と
ゆつて。一度よ攻くらば。一鼓して破るべし。今も一らぐり
向つらるらば。敵の計は落入ん。常侍劉邵が曰く。不如先
叔子の勢を遣し。新城を救と号して大軍却て呉の兵
の後よまひ。その回る路を塞で兵糧をとむ。志あら
へ呉の勢を戦ふ。自ら走らん。魏主曹叡やける。

謀將の意見いやくとまらるる先帝ひう。東へ合淝の城を
うへ南へ襄陽の城を固し西へ祁山の要害を守り若敵
の攻るとたへ何もたの三があらよて拒まぬとひかこちり
朕い兵て三手ふ分先帝の劍効よて拒ん敵争う利
とあはの暇あらんとて刘邵を大将として江夏を救し
田預を大将として襄陽ととせ曹叡がうら満竜ホと
大軍を引て合淝の城まで向ひけぬ去程ふ満竜先陣の勢
を引て巢湖の辺に到り遙く向の岸を望まむ呉の勢かおびこ
としく兵船を調く色々の旗風ふゆるか入る満竜よその
辺の体と伺ひ曹叡を見くすけらる呉の勢とて東の所
よありとひども味方いま遠路とまきたりぬと軍に定めて明

日あらんとちの念し今夜ちひうら敵の船を夜討してその
備なまを攻べかえらるる乱る念し曹叡への義志うんと
驍將張球を五千の勢を付て投火炸を用意し湖口より
攻くらせ満竜を五千の勢を付て東の岸より向しむ夜
も已ふ三更の比ふいりて魏の勢二手ふ分とて呉の水寨
より付き同音を哄と作りけと安案を違とて呉の勢は皆
敵よとへいへんあひさるも哄の言におどろひて上を下へ
騒動し刀よ物の具よとびりぬる魏の勢ちひて竟入
走り散て火を掛けと呉の勢水は溺と焼死するやの敵
とあらむ大将諸葛瑾はさうく逃とて多の兵糧武器と
敵よとられ河口まで引退く魏の勢は呉の船をやき尽して

事初よりし喜び勇も踊りて本陣を回す。詔葛瑾が破れたるよ
 一。陸遜が方へきまら入けしとて陸遜詔將をありけり。か
 今魏の勢。新城を救へし。三手に分て来るもの。味方の
 勢をひて牽ん為さる。我今表をのりて天子を奏す。新城は
 困を解て却て魏の勢の後を困せ兵糧の道を塞で我
 々の前より攻蒐り首尾相顧ることあたはざらん。詔將皆
 亦と同ドけしとて陸遜表をのりて二人の小技を使し。新
 遣一けぬ半途まで魏の伏兵を生取る曹叡とて責て陸
 遜が表を搜し牛一乃ち披て見る。孫権は大軍をのりて後
 を困せ前後より攻んとすの計あり。けしとて曹叡大に嘆
 曰く。陸遜よとて神妙の策あり。若後を困せしとて我

一日も休むま幸まの使を投たり。急で後の用心せよとて
 刘邵を命じて固守しむ。詔葛瑾の巢湖の戦を負て詔軍
 とあ氣を落し。殊に炎天の暑氣を値り。人馬病卧すの多
 り。一々各箇ととて。陸遜が陣を遣して陸遜ひらき
 る。今魏の勢が大なり。味方みな氣をじり。不如軍を
 収めて本國を回らん。ありけしとて乃使を對面し。我
 々の計あり。少もんとて勞し。よとあり。汝回す。さ
 由てやせしとてひけしとて使を回し。詔葛瑾は右に報
 葛瑾問て曰く。陸遜の兵馬を調り。合戦の備をさる。使
 えて曰く。陸都督の陣は上下とあ怠荒んで用心の体へ
 ぬ。詔葛瑾はよくあ。今魏の勢長駈く。汝も陸遜

是と拒の備なくんば。今油断せば必
 破らんとのみで自ら陸遜が陣を行てその体てゐる果
 て敵を拒ぐの用意はくして。諸軍勢の陣外に出して
 時陸遜へ諸大將と。轅門して。碁を囲む。諸葛瑾直内へ
 入陸遜又向けて。やける。今魏主曹叡みづから出て戦を
 受け。その勢をあらたさう。都督いふして拒ぎまへん陸遜も
 めて曰く我あごとと思ふと已まう。今魏の大軍流はまたがの
 勢ひに乗じて直に呉楚を呑んとさ。若共鋒を交へ空
 く兵を損じて益さう。近比敵の後を遮らんとして表を
 天子に奏さう。半途にて敵を奪れ。機謀を以て洩ら
 今又天子に奏し。又の大軍を志し。引退ら。我の御辺と

機をえて動ん。諸葛瑾曰く。今手下の勢をあら退らんとして
 んあり。若延打せば害あらん。陸遜曰く。諸軍り退る
 んあらばよく。喻してそのんと定む。我却して変術
 を設て打立を。今もしまう。退る。魏の勢勝ののて追
 来らん。其の取を取の道さう。御辺に船を調へ敵進
 むの勢ひとさ。我の兵を只一手あひせて襄陽を
 むる体とさ。却て退き回る。是敵を疑ひむるの計
 魏の勢あて追来ら。諸葛瑾と喜び。陣より入て
 船とそら。敵は向の勢ひとさ。ひそる。歸國の用意を
 ぞしたのける。陸遜は冬く大軍を率して。襄陽城へ
 よせけ。魏の勢をよとて。城を出て戦へん。曹叡



岑威



王平

蜀の王平
岑威の
刀を
魏の
馬を
奉る

きうよ止て曰く。陸遜は深き計あり。さう敵を誘ん為さる。輕
ぐく出るとあるれとして。叔弓引籠て居たり。忽ち斥
候の兵走來り。吳の勢三方尽く退きたりと告げまへ。曹
敵人を生じく伺ひいる。一人も残さ回りく。大いなど
ろひて曰く。陸遜が兵を用る。古の孫子。吳子も考らば。
東南いざ平ぐべからんとして。諸將を分て。要害を守ら
せ。み竹くら合肥の城を屯して。敵の変をぞ伺ひける。大の
と死初山まへ魏の勢久く生ざるとえて。孔明蜀の兵を分て
屯田と致させ。魏の百姓と相交て。田を作り。百姓もあはせて
蜀の兵へ只一分とする。若しよ背をのめ。忽ち首を斬る。
法と正しける。人の魏の百姓もこの徳と感とんと安と。業

を樂む。司馬懿へ久く。涪水の陣を引籠り。孔明を退くべ
き計をく。この内悶苦む。長男司馬師來て。かけえ
蜀の勢をさきまへ。味方の兵糧をまびく。奪取今又百姓と
打交て。涪水のおとりに屯田をあた。百姓もよまう。大
んを傾け。その恩も服せむ。とくものあり。是長人の計を
う。この國家の大患をさきん。志る。何れを期ともし。あ
引籠て居る。人まう。何ぞ日を定て。孔明とあらう。大
に戦ひ。両方の雌雄を決し。のんぞ。司馬懿が曰く。我も思
ざる。よあらば。如何せん。孔明は勝べし。とあり。計あり。司馬
師が曰く。智あるものへ。智を使ひ。智なきものへ。力を使ひ。大
百力の大軍を統て。何とく。と程と。怖と。のぞ。と。斥候よ

蜀の勢をさきまへ。味方の兵糧をまびく。奪取今又百姓と

り告て。蜀の大将魏延先日落入る黄金の盛を等々
あげ種く悪口吐て戦ひを催しむと報しければ司馬懿
笑めて曰く聖人も入るとあり。小不忍則乱大謀とな
よく堅守るを上の計とも。諸將血気の勇を持むとあり
と。いひけむ。諸人も怒を推て生ぎりたり。葫荈谷より
馬代山程経て木柵寨を造作孔明見くやけり。某志
の間谷の内又塹を掘るをける柴を積で硫黄焰硝火を
ものをそぎ山の上へ空く假屋を造りたる。内又乾ける柴
をたくて内外とある地雷を伏せ地の底は薬線を通し用
意一斉に備はり。今幸又炎天にて能乾ける時あるべから
計用ゆるし云けむ。孔明大に喜び密に耳を附て計を

授け汝葫荈谷の後より細路を切塞ぎ兵を谷の内は伏
て司馬懿が魏延を追て。その谷をせ入ると見まうは伏勢
をりて。前なる谷の口を切塞ぎ一度火を付て。やま殺せ
若合戦已に初りたるをりて。昼へ七星を畫ける旗を立
夜へ七の燈と照明を焼し。山の上へ出ると。され司
馬懿を引入るの道あり。我もとす。汝が忠義をある是
れ又浩る大事を行む切急と急るとあると云ければ馬
代山計を受けて出せり。孔明又魏延をよび汝五百余騎
よて魏の陣よりよせ司馬懿と鋒をすし人ばあるは
勝しとを用ひむ。只詐負く溜水の東へ逃来り司馬懿は
追来らば汝却て昼へ七星の旗を立るとあるは走り夜へ

七川の燈明をのぞんで走さしむる。司馬懿を谷の内
引入らるべし我らあらば手殺せしむ。汝が功ありとらひ
けしむ。魏延計を受けて出せり。孔明又高翔をよび汝
の木牛流馬を誣してある。ひの二十あるひの五十を一
群とす。おの
く米を積で山路に往来し。魏の勢きたらば、慙と是を
奪とよといひけしむ。高翔計を受けて出せり。孔明す
ち、祁山の太軍を手分して、魏所の陣をぞく守せ。汝も他
の勢の来攻るときは、計りて戦ひ負ひ。司馬懿が、
来るをせしむ。共力を併て大に戦ひ却て虚し。乘じ潜水
の本陣を攻取し。魏將を計を授け、自胡荈谷の傍
に陣を取らる。居りける。魏の陣は、夏侯惠、夏侯和、
ら司馬懿を見へて、やける。今蜀の勢四方に散り、陣を取
ちのく屯田せしむ。久しく留るの計をある。若時を遂て
除らる。人ば根を深く、蒂を固して、後を急と如何とも
べし。司馬懿が曰く、孔明が計を始らる。三人
又曰く、さ程は孔明を始らる。天の人のいふ。この日、太平
を二人我も二人罷向ひて戦べし。司馬懿が曰く、汝もいふが
左右を。をある。とある。夏侯霸、夏侯威を用ひし。即
時、二万の勢を授け、二手に分て戦を催さしむ。夏侯霸
夏侯威は、ち蜀の陣に向ひけしむ。半途まで、蜀の大將高
翔が兵糧を運勢を生あひ、両方より、哄を作りて、討て、蒐
ける。蜀の勢を乱して、走けしむ。魏の勢、木牛流馬五、

司馬懿を見へてやける。今蜀の勢四方に散り、陣を取
ちのく屯田せしむ。久しく留るの計をある。若時を遂て
除らる。人ば根を深く、蒂を固して、後を急と如何とも
べし。司馬懿が曰く、孔明が計を始らる。三人
又曰く、さ程は孔明を始らる。天の人のいふ。この日、太平
を二人我も二人罷向ひて戦べし。司馬懿が曰く、汝もいふが
左右を。をある。とある。夏侯霸、夏侯威を用ひし。即
時、二万の勢を授け、二手に分て戦を催さしむ。夏侯霸
夏侯威は、ち蜀の陣に向ひけしむ。半途まで、蜀の大將高
翔が兵糧を運勢を生あひ、両方より、哄を作りて、討て、蒐
ける。蜀の勢を乱して、走けしむ。魏の勢、木牛流馬五、

蜀の勢を乱して走けしむ。魏の勢、木牛流馬五、

十疋を奪ひ取敵の捨たる馬物の具金鼓を據ひとりて本陣を回り。次の日又推寄て蜀の勢百余人を生投来り。司馬懿その虚実を問けし。諸卒と答て曰く魏の勢多く生ざるをえて我蜀の勢四方に散て田を作り比皆怠荒で用心するところの司馬懿とある。生投を尽く放して回らる。やんし云けし。夏侯和が曰く。まゝの人は放し。今ぞ司馬懿が曰く。量み此ホの士卒を殺して罪造り何うせん。尽く放して魏の大將の仁慈あるを知らし。やん是又うきふんをむとんでその戦心を怠しむ。則呂蒙が荆及びを取たる計あり。今より後名もあき士卒を生投べ。尽く放して回らる。やんとして。魏軍に恩賞を施しける。孔明へ高翔に命とり。蒯

若谷の内へ兵糧をたぎり集る。体とある。やん木牛流馬を誣く。谷の口は往來せしむ。此計をきくもの更にありけり。あのと先魏の勢日こゝ戦ひ勝て分取高名せむ。このあつて。已み并日むり。まゝのりけし。司馬懿も毎日味方の利あるを聞いて。この内をあらど喜ぶ。又あると。蜀の勢五六十人。生投来りけし。司馬懿尺く放して問て。ける。孔明へ。今何もうある。答て曰く。毎日蒯若谷へ兵糧を運で。谷より十里をく。西に陣をとり。司馬懿具を問て。酒をよませ。引出物とらせして。回らる。其夜諸大將を集て。孔明へ。孔明は。自蒯若谷の西に陣を取て。祁山より自餘の大將ととむ。置り。油断して。尽く怠りす。と

孔明の計

汝亦明日力をあてせ。一斉に祁山の陣を攻めしめ我ももつら後陣を繞りし諸將命を受けて退きしむべし司馬懿問て曰く今蜀の勢四方向よりて陣をとる父のまその前を攻めて却て祁山を攻めしめ如何なる故ぞ司馬懿が曰く祁山の蜀の勢の根本を攻めしめ我の直よその根本を攻めしめ四方に分きて陣をとる敵尽く来りてまその拒べし我の隙より自一軍を引いて葫芦谷入りしむ時たる兵糧を焼くへ志する時へ前後相救しとあたるべしと必とて大に乱るべし二人の子服して曰く父の計はまこと妙なり司馬懿又張虎樂綽をよび汝二人のともは五千余騎を引いて救の為より跡もつぎ硫黄焰硝の類を携りて火を付る用意をせよと云けり

二人兵を調へ後陣を繞りし孔明はみづら山の上より望見し魏の勢五千。三千一隊を遣はし前後相助ぐ。渭水の陣を明けしむ祁山へ向ちしむとて急ぐ。魏大将を解をり若司馬懿及びけり寄来らるべ却て勢を分ぐ。渭水の南より魏の陣を奪ひしめとて備を立て相待しむ。去程に魏の大勢尽く祁山の陣をちよせ。映の色を揚ちしむとあれ。映しんで攻けしむ。蜀の兵四方より来り集り力と併ぐ拒ぎ戦司馬懿は蜀の勢の一處に集りたるをてして。心の内大に喜び。二人の子を伴ひ中軍の精兵をこざと。小勢をまごりて。葫芦谷をせ向魏延の勇てその路に居たりし。魏の勢の来るをてして。五百余騎をて路を隠し

司馬懿真先又進で大音あげ賊將逃るとあつれよ。つ
 かりけよ。魏延刀をまへして。二三合戦ひ馬と打ぐ逃
 る司馬懿逃さどと追うけらば魏延七星の旗でので
 んで且戦ひ且走る。司馬懿の勝めのめで外に敵の勢を
 く魏延又小勢をうけてて。天の助し喜び兵を三手
 分ぐ。二人の子を左右に備へ飛がどく追蒐る。魏延
 又打負て。甲盔をぬぎさて。遠望し七星の旗谷の口へ
 ぐりけよ。五百の勢を引で。谷の内へ逃入けり。司馬懿
 続て追蒐ける。谷の口は馬とくら人を合せて内の様と
 せしむる。谷の内へ敵の勢もあつれ。只山の上へ敵の
 と立連ねたりと。告げよ。司馬懿曰く。敵の兵糧と

くつとる。ちり速く火をうけよ。入馬勢ひのめで
 谷の中へ入けるが。忽ち假屋の上へ柴を積たる。付前
 魏延が力を横へ。立たる。司馬懿大に驚き。二
 人の子を向てゆける。一敵の勢後ちり。谷の口を塞
 がして。出づまどと。急退るんとせむ。あつ然と。火
 咲の音ひいて。山の上より。おびろく。火炬をあげ下
 ロを。やまき塞ぎ。司馬懿膽魂を失ひ。兵を一所に
 むる。あつ四方の山より。火矢を射ると。雨のごとく。鉄
 又逆り。立連ねたる。假屋の中なる。乾き切たる。柴薪
 火の付く。火火天を焦し。地の底より。硫黄硝子。生
 黒煙谷の内へ。遍満せり。魏延のあつ。敵を谷の内へ

廖化一騎
仲達追之



廖化



かびき入と善ての計あり。後の細路より出んとせらる。よ
そや大木より石をのりて切塞ぎたれど。天を仰ぐ長葉
し。我今非命の死を受とのみと。此然として立居たり
去程は火焰谷中は満く。藁線尽く。逆り逃るべき路
なく。謀卒死せらる。その大半は及びけし。司馬懿馬よ
り下り二人の子を抱き入り。色を放りて。哀を哭き。我
いよ父子との山ありと死を乞き。叫ぶ。運命の
まど尽き。さるるや。俄に狂風吹起り。真暗は霧掩て。霹靂
一色ひびく程。そあり。驟雨降来。その急なる。と盆と
傾くるがごとく。大雨雲霧。して申の刻より。夾の刻の
り。平地水深き。三尺をり。ちりけし。谷中は焼上りたる

火尽く。滅く。地雷響音。火器功あり。司馬懿大は喜ぶ。是
と死し。生かさん。何なる期せん。とて力と尽して。路を開き
谷の口まで出けし。蜀の大將馬岱兵を引て。出来ると
た。又魁の軍馬をせ来り。司馬懿を救く。戦ひけし。べ
馬岱山小勢。引て。司馬懿を救く。張虎樂進へ
敗軍を収く。渭水の陣を回りけし。南の陣屋は。已に蜀の
勢を攻取。郭淮孫礼。浮橋の上。支く。嘆き叫ぶ。攻戦
司馬懿兵を引く。回りけし。蜀の勢も。引退き。渭水の南
に陣をとる。司馬懿は。此の陣を敵とせ。られ。橋河に渡り
て。攻来らんとせ。怖と浮橋を焼落して。山岸より。戦ひ
扣たり。祁山は向なる。魏の大勢あり。たまで戦ひ

平北將軍陳倉侯の官で削り士卒の列を賤しける
 馬岱の責られ退ひて我陣を向りけり孔明は之を
 樊建と使として蒞しと申ける我もよりの汝が忠
 義を志りてその計を成さしむるをよむものぞうき大雨降
 て司馬懿をも取返し魏延をも殺得ぞ今日已とて得
 たりて汝を鞭ひ先告て楊儀が所為ありといひて魏
 延が憤をさけよ他日功をのりて第一とし恩賞諸人の上
 に出づるとして能く計を授けしる馬岱は之を喜ひ次
 の日魏延を見へく罪を謝し元來某が所為ありあはれ楊
 儀が計ありと告はしむ魏延もよりの楊儀を恨む孔明は告
 て馬岱を已が手下に用ひんととのぞむ孔明再三許答せざ

りしが魏延志ひて来けしとて乃ち答しけり司馬懿は軍
 を集く潛水の北に羽箭を射軍法を出してやけり
 我諸人の勸まするも出で戦ふ破れざるの今とあ
 り。今より後再び生んとしめものあらん必を首と列
 んとして強固く守りて出でざるけり或は郭淮きたり
 孔明大に戦ひ勝りて渭南の砦を奪ひぬ必を處
 て扱んで陣を移さず此の孔明がみづから出て巡
 見さるる此を為さずとていひけり司馬懿は曰く孔明
 の武功は出で山より東の方を陣を取ば我々が為
 したる毒さるは是れ憂へし若し潛水の南に生て五
 丈原を陣とすれば味方を憂へしとて人を出し

伺しむれば果して孔明五丈原の陣を移したるなりとや。司馬懿手とりて額を撫てやける。され大魏皇帝の福あり。孔明もさうぞと。変ありん。人も出ると。あられと。称きびしく守ける。孔明の陣を移して五丈原に出張し。毎日戦ひを催せども。魏の勢一人も出さず。けさる。司馬懿を辱し。少女の髪を飾る巾幗と。ふのし。藁き衣と。盒入れ書簡をそへ。魏の陣へ遣けり。魏の諸大將も事うと。あやと。使を止て。司馬懿と共に盒を披けば。巾幗藁衣を入る。一の書簡を添たり。とあやち披きとる。その書曰く。

漢丞相武侯侯諸葛亮嘗聞管子有云禮義廉耻

国之四维。四维不張。國乃滅亡。切惟司馬仲達既為大將。統領中國之衆。不當被堅執銳。以決雌雄。乃甘窟守土。巢以罽。刀箭前。其寡婦又何異哉。今遣人送巾幗素衣。如不出戰。可再拜而受之。倘有男子。襟早與批。回休期。赴之敵。

司馬懿了て心中の怒も。佯ひて打笑ひ。を婦人のとく。みぬ。即ち贈物として置。その便をとり。持成孔明の寝食常々軍中の務を問。使答。曰く。丞相夙夜。寐。對二十以上。る。自。是。と。覽つ。存。又。吹。所の食。幾。升。と。き。び。と。結。け。司馬懿傍の人。と。向。く。す。け。る。孔明。食。少。さ。る。事。煩。し。豈。よ。

くゞくゞけんやと。乃ち使て回しける。使五丈夫原を回
りて。司馬懿贈物を受。尺簡をとて。只寝食軍務の事を
問ふ。某此のどくを答たり。司馬懿をよみて。孔明食
少く。事煩し。豈よくス。けんやと。ゆひいと詰
けよ。孔明大に嘆して曰く。仲達よく我をよまむ。の時
主簿楊顛とのめもの進出くやける。某常々丞相の簿
書を檢めしめて。凡事を治る。定まる。体あり。上下相
侵。とどく。某福がく。家を治むるの譬。と述ん。夫人
の家を治むる道。あり。奴婢の使。のあり。奴は出く
田を耕し。婢は内。あり。て飯を炊く。雞は晨と告。太い血を
とく。む牛の重。負馬の遠。を行。私業外。求め。して。皆一家

の内。備まり。家の主の従容。して。心を安ん。枕。と高
し。く。飲食。もし。の。勞を。主一人。とく。務。バ。形。疲。氣。困
して。卒。よ。の。も。ある。と。ふ。けん。是。智。の。奴。婢。雞。犬。よ。
が。ざる。よ。あ。ら。ぬ。家主。の。法。は。背。け。が。あ。り。の。人。は。古。人。も。
坐。而。論。道。韜。之。三。公。作。而。行。之。韜。之。士。大。夫。と。の。り。む
く。丙。吉。道。は。横。た。つ。死。人。を。問。む。却。く。牛。の。喘。を
憂。と。陳。平。の。婁。と。米。と。の。數。を。志。ら。ぬ。して。是。か。の。心
くら。主。る。もの。の。め。の。の。り。今。正。相。い。ら。ぬ。れ。細。なる。事。ま
でも。終。日。汗。を。あ。ぐ。して。勞。の。人。る。死。や。の。大。天。暑。氣
よ。あ。ひ。て。卒。よ。の。争。ふ。神。氣。の。倦。疲。を。の。ぬ。る。の。念。き。司。馬
懿。が。云。一。言。が。真。の。肺。腑。を。見。透。した。る。詰。よ。て。ゆ。と。謙。也

けねば孔明涙を流して。我らとて志づらざるやあらば但
先帝の重恩を被ひり。孤を託するの重く受く。常々他
人へ我心のどとく。カキ益する事と思ゆ人。まゝ自ら務
る事ありといひけし。聞人。涙を流しける。案の正く
日を經て孔明氣疲病發て。心身安らざるけし。諸將
なく守く。互に軍のありけり。此とた魏の陣みへゆるく
の大將孔明巾幗縮衣を送く。辱めける。司馬懿の事を
受く。孫戦ふとて。聞傳へ怒を令ぐ。尽く本陣に集り。
我ホへ。お大國の名將あり。安ぞ蜀の人。耻しからん。
福づくも生く。勝負を決せん。と云けし。司馬懿笑ひて曰
く。我戦へ。辱を得。と好まらば。何如せん。天子

詔して固守して戦ふとあれと宣へり。今も生く戦ふ。され
勅命は替さる。諸將の事を以て。言へ出さざらん。と
おな怒けし。司馬懿が白く。我もとより。出く戦へん。とを
おもへ。今都へ表をあげ。天子に奏しく。後諸大將と。まゝ
く出く戦へし。して。やがて使をよ上せける。魏主曹叡の
とた。おな合沓の城。ありける。司馬懿が表を得。開き
える。表を曰く

臣司馬懿謹表。臣才薄。任重。深蒙眷委。令臣堅守不戰。
以侍其敝。今者蜀臣魏延。葛亮。輕臣如奴。隸待臣如婦人。
遺以巾幗。耻辱至甚。臣先達聖聰。且夕將効死。一戰以
報先帝之大恩。陛下之重祿。臣不勝感激之至矣。



孔明計
 胡蘆谷
 仲達
 燒計

司馬懿



司馬懿

司馬昭

馬

曹叡見よと群臣をむろひてやける。朕已に司馬懿に命じて固く守りて出とあられとあり。今何故とぞ表を以て戦んとを望るや。衛尉辛毘曰く仲達はよく出て戦ともあつた。是必き孔明が辱しむるを見て。諸大将を戦へんと怒り。是を制せんきやうとくして空く表を上く。天子より制しむるんことを願の計とくらん。曹叡げよもと同し。乃ち辛毘を勅使とし。節を持て司馬懿が陣に到らしむ。司馬懿むえて礼を諸大将を集て。この詔をきく。辛毘やける。天子勅命あり。称出く戦下あられ再び戦んとす。この是勅命を背ちる必に罪を正さんと云けり。諸將とて黙然として退散。司

馬懿乃ち辛毘に向て曰く。足下よく我心をきり。入り。浩る上へ再び出んとす。このあるやうにして。其の土民は此事をいひ傳へさせ。魏の天子辛毘を使として。固く守りて一人も出て戦とあらしむ。此を司馬懿もあて出がて。人の朝を避たりける。蜀の典軍書記樊建丞相の令。董厥二人此計を傳き。急ぎ孔明を告げし。孔明笑ひて曰く。これ司馬懿が。諸軍を安んじて。動さしむるの計あり。姜維が曰く。丞相あつてきり。孔明が曰く。仲達元より。出て戦のしは。表を上て。遂に戦んとを求る。武勇ある程を人よまじし。らん為ち。豈聞をや。大将外に在る。君の命も受ざる。ある。要んぞ。千里の遠に。出て君を戦を請

正あらん是仲達が我を辱められたるとして手下の諸將
 怒り戦んて勇む是を制せん為、斯く沙汰する者なし。諸
 將より再拜して曰く。丞相まことの万里の明見あり。時は成
 都より尚書費禕きたりの孔明を見くやける。呉の孫權
 三十万の勢を與して。三方より攻上る。魏主曹叡みゆら
 合沱城を出て。滿寵田豫劉昭を兵をも分て拒せ。滿寵先計
 として用ひて。呉の大勢を巢湖にて夜討み。及呉の勢あつて
 討と。兵糧武具を焼きて。尽く。氣を失ひ。病卧の大半を
 及べり。陸遜又孫權を兼て上之。敵の後を襲へ。やんとせ
 る。その使半途より魏の伏撃を生夜に。棧謀をくぐり。受
 て。呉の勢大に打負引退きたり。と告げ。孔明も驚き。

て。長嘆をこして。一色昏絶して。地の上は倒とける。と。諸將扶
 け起し。けし。半時をうり。して。人心地付大息。継て。やけり。我
 心昏乱して。舊病又興。今生の壽も。ちた。久し。う。は。じ。と
 て。その夜入。扶られ。外に出。天文を仰き。大に。おどろ。ひ。て
 内より。姜維を呼。で。や。け。る。我命を。ぞ。よ。夕。ま。あ。の。姜維
 泣て。曰く。丞相。あ。る。れ。ば。浩。る。事。を。宣。ぞ。孔明。が。曰く。我。三。口
 の。星。の。中。で。え。る。は。客。星。や。ま。と。く。明。より。主。星。の。光。う。さ。す。ら。ぬ
 應。と。少。し。その。色。を。変。た。り。是。を。の。我。命。の。終。を。し。ま。す。姜
 維。が。曰く。古。より。祈。を。ま。す。と。禳。て。あ。の。丞。相。幸。は。此。術。と
 志。の。の。入。り。今。ち。う。ん。ぞ。禳。と。ま。す。て。天。に。祈。め。ら。る。孔明。が。曰。我
 々の。術。を。習。て。く。し。汝。鎧。た。る。兵。七。四。十。九。人。を。扶。ん。ど。

新編 魏志 卷之四

三十三

とぬ皂き旗を取身への皂き衣を被て帳外に守護せしむ。
又自ら帳中にて北斗を祭る。若七日がぬらぬ主燈ま
さるるに我壽命又十二年と云ふ人若主燈まのりたるに
まこと必を凶とぐじ。汝らあふ無用の人を入るるとあるに
いひけむ。姜維命を受く。他の人を固く制し方用る不
の器物の童子二人運をりけり。此夜へ涼風蕭索して
銀河天を横へり。零る露冷々として。旌旗動も。刀斗の吉
もさくして。いよ物淋しくけるが。姜維四十九人の兵と帳
外を守護しけむ。孔明もく帳中へ入りて香と焚花
とさげ。大方七盞の燈明をとおし。回四十九の小燈と
ら。中央の本命の主燈一盞を置く。自ら拜伏して祭る。

天は初ひてやける。亮乱世に生じて。身を農迹に隠すと云
ふ。先帝三顧の恩を受託を托するの重を被る。此よりて大
馬の勞を尽し。魏統の大軍を領し。六回まで祁山に出で。誓
て逆賊を誅せん。とさるるも。意ざりき。將星降るとして。今生
の命。よまされ終らん。と云ふ。謹で静夜をのりて。昭々皇天后土
北極元辰を告ぐ。伏して望らる。天慈監察を垂るるとして。
とある。青詞を編して曰く。

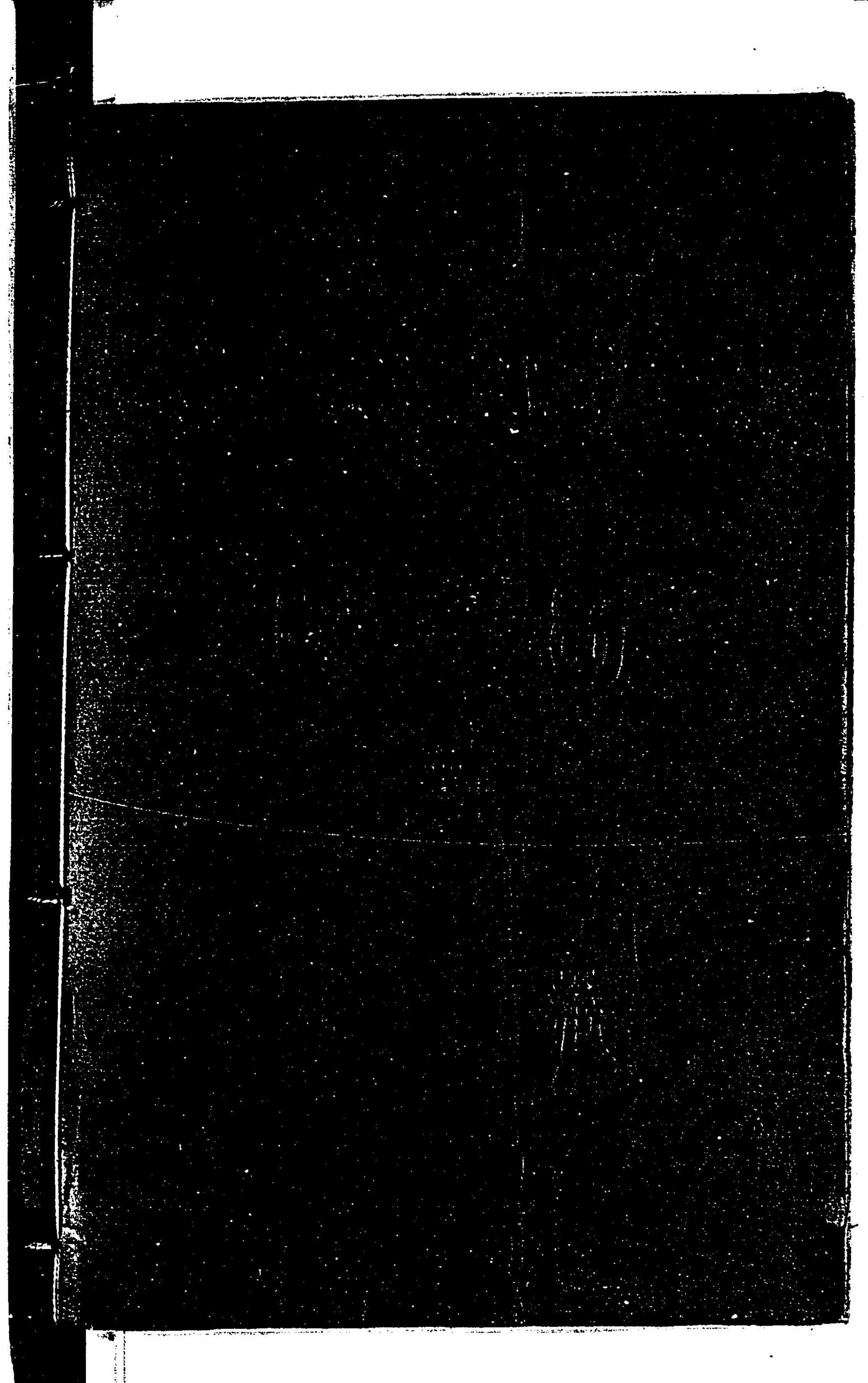
伏以周公代姬氏之厄。翌日乃瘳。孔子值三匡人之圍。自
樂不死。臣亮受託之重。報國之誠。開初蜀邦。故
平魏國。率大兵于潛水。會衆將于祁山。何期舊疾纏
身。陽壽欲歿。血謹書尺素。上告穹蒼。伏望天慈。曲垂庇
護。

箕上報先帝之恩德下救生民之倒懸非敢以女祈實
由懇切下情不勝屏營之至

孔明祝曰且待次日病癒扶起事治之血
吐止死又甦之魏之伐計論
夜少置踏手稜をあら

繪本通俗三國志七編卷之四終

22
74
28



122
74
28

繪本通俗三國志

七編
四